

『社会言語科学』特集論文の募集のお知らせ

学会誌編集委員では、「特集・実験による言語行動の研究」の論文を募集しています。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。原稿の種類、原稿の書き方、投稿のしかた、投稿先などは、通常の論文の場合と同じです。投稿に際し、「特集」のための論文であることを明記してください。

論文投稿の締切 : 2005年11月30日(消印有効)

論文の投稿先 : 〒169-0075

東京都新宿区高田馬場4-4-19

(株)国際文献印刷社

社会言語科学学会学会誌編集委員会

電話 03-3362-9741

お問い合わせ : 学会誌編集委員会委員長 日比谷潤子

E-mail jhibiya@icu.ac.jp

FAX 0422-34-6983

特集 実験による言語行動の研究

今回の特集のテーマは「実験による言語行動の研究」である。

言語行動を社会的な文脈で考察する場合、さまざまなアプローチがあり得る。自らの使用経験を振り返り直感的に考察する、シナリオ、小説などの用例を収集する、自然な会話を観察し分析する、質問紙によって言語使用や言語意識によって調査する等々。実験もそうしたアプローチの一つである。

実験は心理学的な研究においてよく用いられる手段である。ただ「実験」というと、実験室で、実験装置を用いて刺激に対する反応を測定する、といったものを思い浮かべる方が多いかもしれないが、ここでいう実験は広い意味でのものである。実験室実験に限る必要はない。要請されるのは、状況を構成する諸要因を統制して条件間の比較を行うこと、である。

たとえば質問紙を用いて仮想場面でどんな発話をするか、どんな発話が適切かを検討する場合であっても、統制があって条件間の比較がきちんとなされていれば実験と見なしうる。事例観察についても同様のことが言える。ただし、こうした条件比較のない調査研究、事例研究は対象外となる。(もちろん、条件の統制のある研究を補完するものとして、調査や事例の研究データが含まれることは差し支えない)。また、実験的研究でも、(これも広い意味ではあるが)「社会」という視点を含まないものは対象外とする。

具体的には、ポライトネス、謝罪、要求、ほめなど種々の言語行動のストラテジー、会話の構造、言語と性、方言への態度、スピーチ・アコモデーションなど、多くの問題がこ

の方法で検討しうるだろう。当然のことだが、指標(いわゆる従属変数)を言語形式、言語内容とする研究に限る必要はない。言語形式や言語内容が聞き手にどんな影響を与えるか、コミュニケーションの効率とどう関連するか、といった観点の研究も歓迎される。言語の周辺にある、身振り、表情、口調など、非言語的コミュニケーションの研究や、インターネット等メディアにおけるコミュニケーション行動の研究も、今回の特集の範囲内と考える。

実験的研究は、「言語の社会的文脈での検討」という見地で評価した場合、長所も短所も有する。長所の一つはなんといっても、状況の統制によって、何が原因になっているか、という規定因を体系的に明確にすることができることであろう。たとえば、聞き手との対人関係や発話状況を操作した場面を設定することで、こうした要因が敬語の使用に影響を与える要因を体系的に明らかにできる可能性がある。また、多くの実験的研究は、得られた指標について何らかの数量化を行い、条件間の比較を統計的に行う。これによって得られた結果の一般性について、裏づけが得られることになる。

最大の短所は、状況設定やデータの現実性の問題である。実験で設定された状況は、変数を統制するという配慮から、現実の多くの要素を切り捨てなければならない。このため、得られた結果が、現実を反映しないものになるおそれがある。また、一つの実験で明らかにできることは限られているので、その研究の位置づけが不明確になる、という問題も生ずることがある。実験を計画する際、また、得られたデータを解釈する際、こうした点に十分に配慮が必要となるだろう。

この特集に投稿される方は、そうした長所、短所を念頭において論文を準備されることを望む。本誌は平素心理学の研究者の方々の投稿が比較的少ないので、もちろんそれは歓迎するが、他の諸分野の方々にも、上記の視点で研究を進めている方はおられると思う。広い範囲からの投稿を期待するものである。

(イシュー・エディター 岡本真一郎)